

追悼 内藤 豊 先生の思い出

高橋 三保子 (筑波大学 名誉教授)

COVID-19 の話題が日本中を席卷しているゴールデンウィークのさなか、ゾウリムシを「泳ぐ神経細胞」と称した内藤 豊 筑波大学名誉教授が1月17日に他界されていたという情報が飛び込んできた。その知らせは驚きとともに、誰の脳裏にも懐かしい思い出も呼び起こしたことだろう。

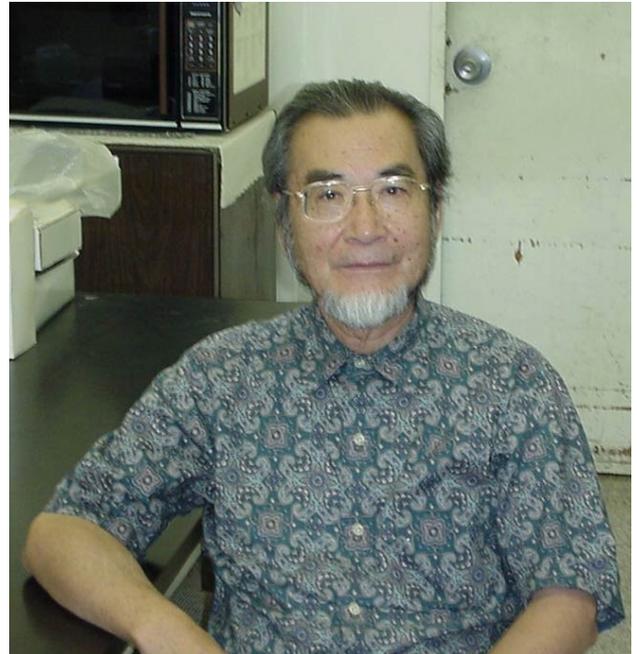
内藤さんの出身研究室の東京大学の動物生理学教室は、鎌田 武雄 教授以来、特に原生動物を使った膜の電気現象の研究の中心だった。今では、常識中の常識になっているけれど、ゾウリムシが機械的な刺激に対し逃避反応をする時に、電位依存的にカルシウムチャンネルを活性化し、カルシウムイオンが直接繊毛打方向の逆転を引き起こすことを、内藤さんは見事な実験で証明してみせた。この研究は、1973年日本動物学会賞の受賞に繋がっている。

内藤さんは知的好奇心が旺盛で、科学の分野を問わず、筑波大学の教員用ラウンジで、議論好きの人を捕まえては科学談議をしている姿が目につかぶ。UCLAでの Roger Eckert 教授との共同研究、定年退職後は自ら研究費も得てハワイ大学で研究を続けるなど、晩年になっても科学への情熱は衰えることは無かった。

群れるを好まず、来るものを拒まず去る者は追わず、卒研究生も自分で発掘したテーマに取り組み、それを全面的にサポートする形で研究指導をしていた。

私事を言えば、「日本で伝統的に使ってきたゾウリムシ (*Paramecium caudatum*) で、突然変異体を取って

欲しい」と当時 UCLA におられた内藤さんからの要請で2年の留学の機会を与えていただいたし、筑波大学に助教授として呼んでくださったのも内藤さんだった。もう40年以上前のことである。浮かぶのは、「ありがとうございました」という言葉しか無い。



ハワイ大学 Richard Allen 教授の実験室にて、2000年頃

内藤 豊 先生 追悼集投稿サイトより、管理者の許可を得て掲載

<https://sites.google.com/optphys.com/dr-yutaka-naitoh/>